集団集落移転

研究員　草　刈　いづみ

1．研究の背景

鳥取県内の中山間地域では、各集落で高齢化や過疎が進み、地域での自助努力に限界を生じている地域が多数ある。行政サービスの行き届かない地域、公的施設や公共サービスの撤退は地域住民の日常生活、利便性に大きな影響を及ぼしている。

このような状況に対応するため、かつて集団集落移転を選択した地域が鳥取県下に存在しているが、これらの集落に移転当時居住し、現在も移転後の集落に居住している人を訪ねてヒアリング調査を実施した。またその際、今後、中山間地域の諸問題に取り組んでいく上で、移転という手段を選択肢の一つとして考慮することができないかどうかを念頭に置き、調査を行った。

2．研究内容

鳥取市用瀬町にある杉森・板井原地域（現・旭丘地区）、八頭郡八東町横地・妻鹿野（現・八頭町細見地区）を訪問、実際に移転前集落に居住し、現在は移転後集落で生活をしている方に聞き取り調査を行った。

2．1　杉森・板井原地域

杉森・板井原地域では昭和50年に集団集落移転を行った。移転に際しては移転先の土地の確保、各戸の建て替え資金、お墓をどうするか、財産区（山林の権利や管理）の問題など、多くの課題があった。しかし農業後継者の問題や、それまで山仕事や農業収入で生活が賄えていたものが、次第に町場の工場へパート通勤して稼いでくるものが増え、生活の基盤が集落から乖離しつつあった。通学の問題やお嫁さんがきてくれないといった問題も非常に深刻であった。

写真１．移転記念碑

話し合いを重ね、集落が合意し移転が実施された。移転には当時の農協の上部の人が尽力されたそうである。また移転先となる地域に山林や農地を所有する人々は、移転してくる人々の宅地造成のために土地交換に応じるなどの協力を惜しまなかった。住宅の建築には公的資金の借り入れ、財産区の山を売って移転家族それぞれへ資金を作るなどして対応した。

当初は通いで山林・田畑の手入れをするつもりでいたが、次第に足が遠のき、現在では少しずつ荒れ始めている。

２．２　八東町横地・妻鹿野地区

昭和47年、かねてより集落側からも冬季の積雪が２ｍを超え、通学や通勤に困難だとの移転要望を出していたところ、集落再編モデル事業を受けてみないかとの打診が行政側からあった。反対も数戸あったが地区内で説得し、横地、妻鹿野数十戸が「細見」に移転した。このモデル事業は県内では八東のＩ事業のみで全国でも5,6件しか実施されていない。同時に墓地、共同作業所、農機具庫等も移転し、設置した。決断してよかった点は、オイルショック前の事業だったため、１棟あたり300万円程度で住宅が確保できたこと、移転したことで集落を離れて行く人に歯止めがかかり、現在は人口増加につながっていること(集落内)等である。

移転前集落の田畑・山林は細見から通いで(８Km程度)手入れを続けるつもりであったが、現在は耕作放棄地がほとんどであり、当時の村の様子が分からないほど木々が生い茂っている。

３．効果・評価

２つの集団集落移転事例を調査した結果、移転したことで過疎や人口減少に歯止めがかかっていること、杉森・板井原地域では嫁不足が解消し、移転後に結婚して家庭を築いている者もあり、横地・妻鹿野では地域内の人口が増加している。

また、もし、移転しなければ過疎や高齢化で集落が機能しなくなっていた可能性は大きい。

墓地の移転については、結果が分かれている。墓地もあわせて移転した横地・妻鹿野地域では、かつての集落へ通うことが少なくなり、ほとんど山林と化している。逆に杉森・板井原地域では墓参りに訪れる際に集落に通じる道路の草刈りをしたり、この地域は智頭町の板井原地域にも道続きであること、赤波川の甌穴群があり観光客が訪れることなども手伝って若干当時の面影を残す。

移転という選択も、自助努力の一つではないかと考えた。

また、昭和47年、50年という早い時点ですでにこのような試みが全国的に実施されていたことから、今後も調査を続け、過疎や中山間地域において高齢化がより進行した現在での移転の課題や実現性について可能性を探っていきたい。